Résumé

In the seedlings of *Lycopersicon esculentum* the opposite arrangement of cotyledons is not followed by a distichous phyllotaxis, but immediately followed by a spiral one with (2+3) contact. In a few seedlings a (1+3) phyllotaxis is also observed.

It is well known that, in some plants, adventitious embryo-like buds (embryoids) arising from the callus cultured on the nutrient media have leaves which can be considered as cotyledons. But the adventitious buds differentiated from the callus at the cut end of the stem of *Lycopersicon esculentum* bear no cotyledon-like leaves. The early phyllotaxis of the buds is neither opposite nor distichous. It is spiral with (2+3) contact parastichies from the first.

In the seedlings of *Taraxacum albidum* the opposite arrangement of cotyledons is followed immediately by the distichy. Therefore the phyllotaxis of seedlings of this plant turns out to be *Vicia*-type. The adventitious buds developing from the callus on the cut root of *Taraxacum albidum* have no cotyledon. In the majority of the buds the phyllotaxis is spiral from the first, but in some buds early phyllotaxis is distichous and it gradually changes to spiral with (1+2) contact parastichies.

It should be noted that in adventitious buds the shoot apices have a tendency to form the spiral phyllotaxis from the first without preliminary arrangement, such as decussate and/or distichous phyllotaxis.

○オーストラリアの珍低木セレノタムス（久内清孝・小林義雄）Kiyotaka HISAUCHI & Yosio KOBAYASI: *Selenothamus helmsii* Melville.

1969年の暮から翌年の春にかけて小林は8名の微生物調査団を率いてニューギニア，ソロモン群島へ出かけたが，その帰途，オーストラリアに渡る予定を公表したところ，久内老は早速一葉の写真を示して彼地の然るべき学者にこの植物の名を鑑定してほしいとのことであった。見れば砂漠地にでも生ずるらしい棒状の植物である。広い砂漠にこれを探し求めることは容易ではなかろうが，せめて名前だけでもと思って引受けた。さてシドニーに渡り，植物園内のおし葉館を尋ねて，居合せた婦人の分類学者にこの写真を示して鑑定を乞うた。しばらく考えた末に，紙片に書いて呉れた学名が *Xanthorrhoea* sp. であった。これ以上聞き正すのも無駄と思い，礼を述べて引下っ

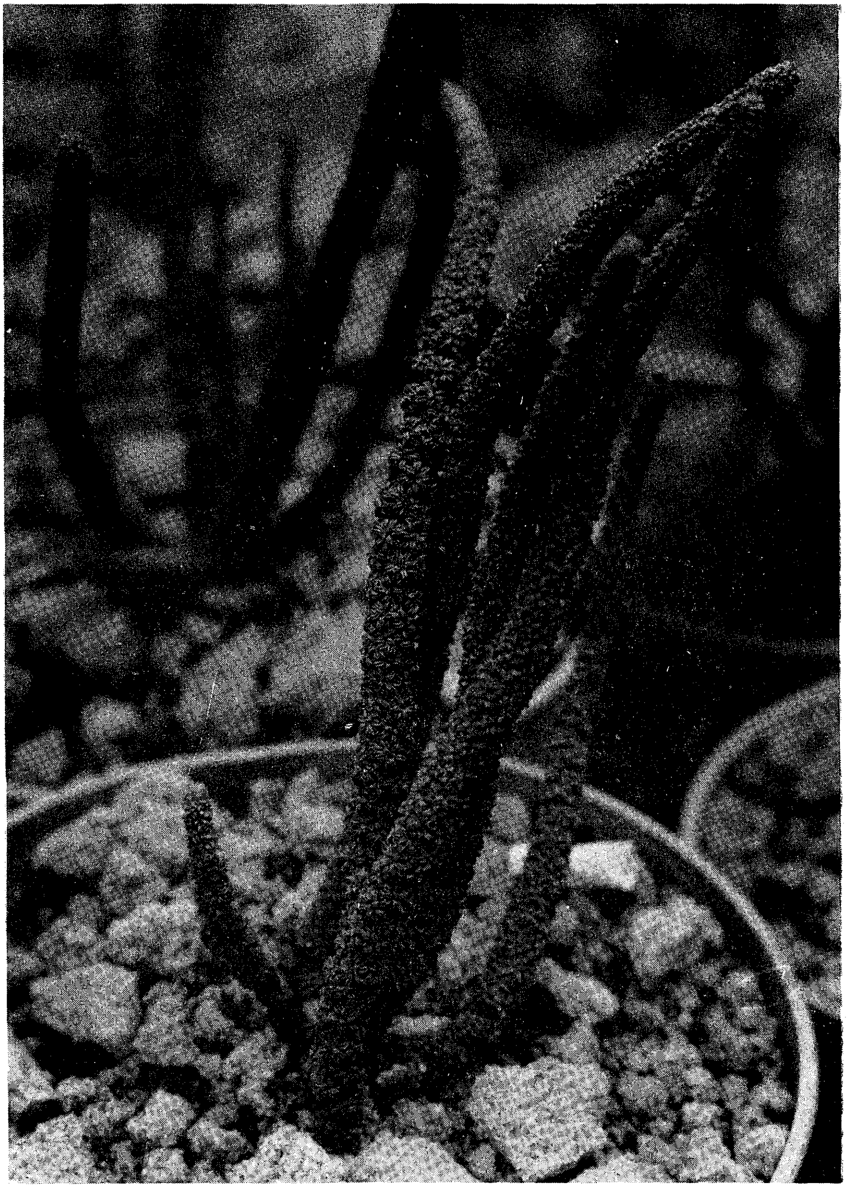

Fig. 1. Perth 植物園で培養のもの（小林写真）Pot cultivation of *Selenothamus helmsii* at King's Park, Perth, Australia. Photo by Y. Kobayasi.

た。小生でもススキノキ科の珍草木 grass-tree の長さ 1 m 余になる花穂と，この写真のものとの相異位は判別出来たからである。

さて久内老には相済まないが，この問題は解決出来なかったこととして，次の目的地 Perth へ向った。ここはドライフラワーの中心地であり，春のシーズンは既に終り，真夏の2月初旬であったが咲き残りの花を求めてパース附近や King's Park の植物園を一通り見てまわった。さて急がしく実のり多い日程も終り，次の目的地へ向う前日に，公園の主任 Beard 氏はとくに大事に育てている植物の鉢置場に私を案内して呉れた。真先に示された植物を見て私は驚きと感激のあまり飛び上ったほどである。そこには問題の植物の幾鉢かが大事に育てられてあるではないか。庶民的な表現ではあるが，“アッと驚くタメゴロウ”であった。

聞けばこのパース市から北700キロの半砂漠地帯にある塩湖 Austin の畔が原産地という。生品の一部と色刷りの生態写真も貰うことが出来た。北半球のアッケシソウに似た生態であり，全体が薄緑色である。

花は極めて細かく棒状茎の全面に生じ，変形した小さな葉にかくされている。鱗毛の存在によって全体が薄緑色に見えるらしい。芽生えのときには正常形の葉が形成されるそうである。これがアオイ科の植物というのも私にとっては驚きであった。鉢植えを一見すると鹿沼土の大粒のもののような基物を用いてありアッケシソウの栽培のように何等かの秘訣があるらしいが，無躾な質問は遠慮した。

久内は一昨年東京青山の花茂花店へ近ごろ流行のドライフラワーを見に行ったら，階上の一隅に集めてあったサンゴ類の堆積のなかにサンゴに似た植物を見つけて手にいれたが，その所属など判からず行きづまっていた。其後誠文堂新光社発行のフラワーデザインの本 (1968) の中にこの写真があることを知ったけれども名称としてはヘルムシーとだけあった。その後濠州大使館商務官主催の濠州から輸入のドライフラワーの展示会が赤坂の三会堂で開かれたので見物に参加したところ，本品の相当量があって，それにもヘルムシーという札がついていたので，この名で市内に拡がっているのだと思ったが，しかし，これでは姓がわからないままの名だけで人を探すようなもので手におえない。もちろん Helm という人の名を epithet にしたものだろうがそれ以上に手がつけられない。もっとも，そんな名の植物をいちいち拾っていたら終局点に達するだろうが，これまた容易なことでない。もしいくつか拾ったところで所属がわからないのではどれにしてよいか見当がつかず，これから先は行止りという通路でよく見る立札に直面したように行きづまって，そのままにしているうちに忘れてしまったところ，小林氏がニューギニヤ，ソロモン，ブーゲンビルを経てオーストラリアに歩をのばすという計画を公表されたので急に思い出して羽田出発の前夜写真を渡して現地で調べてくれるように依頼した。もちろん彼に手柄をたてさせるつもりではなかったが，その写真によるシドニーでの結果は小林が上述の通りであったのであるが，

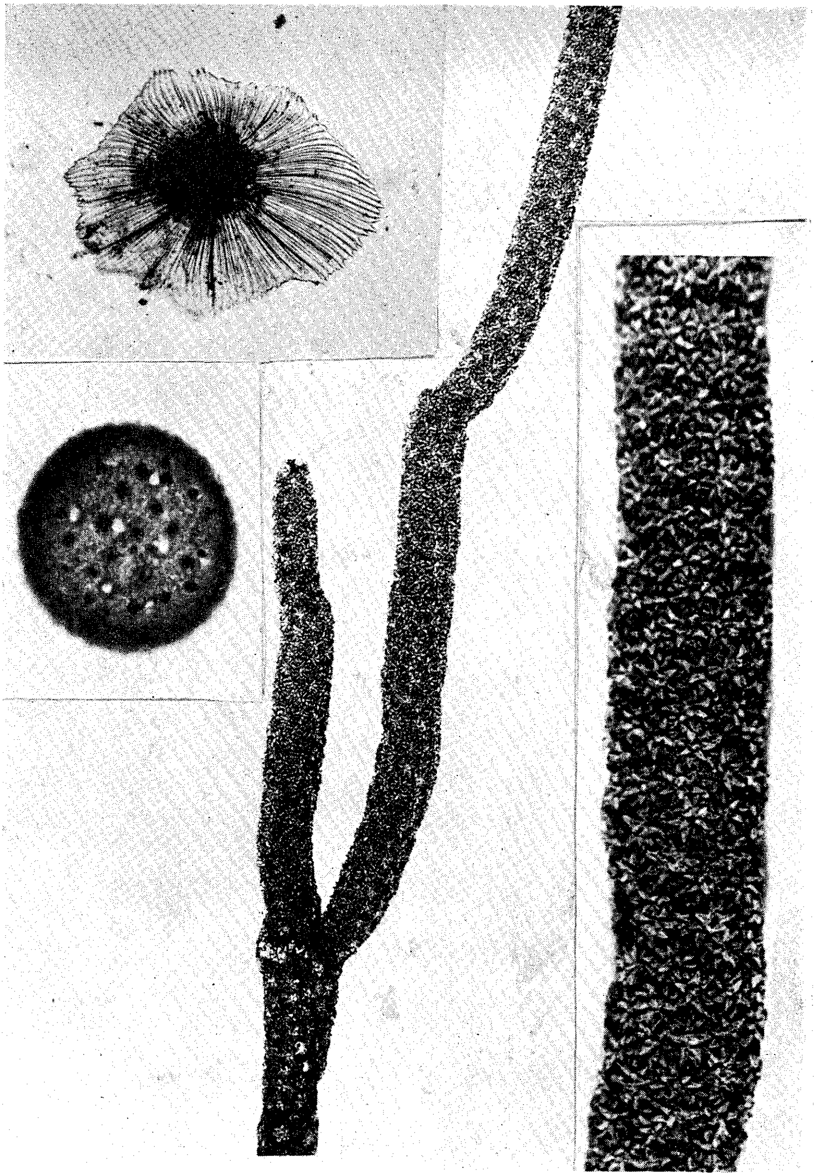

Fig. 2. *Selenothamus helmsii* (right×1, left×1/2) in Tokyo market as a decoration flower, and its pollen grain and lepidote scale (×50) removed from it. 東京にて入手した乾燥品と その鱗片及び花粉粒 (右×1) (左×1/2)

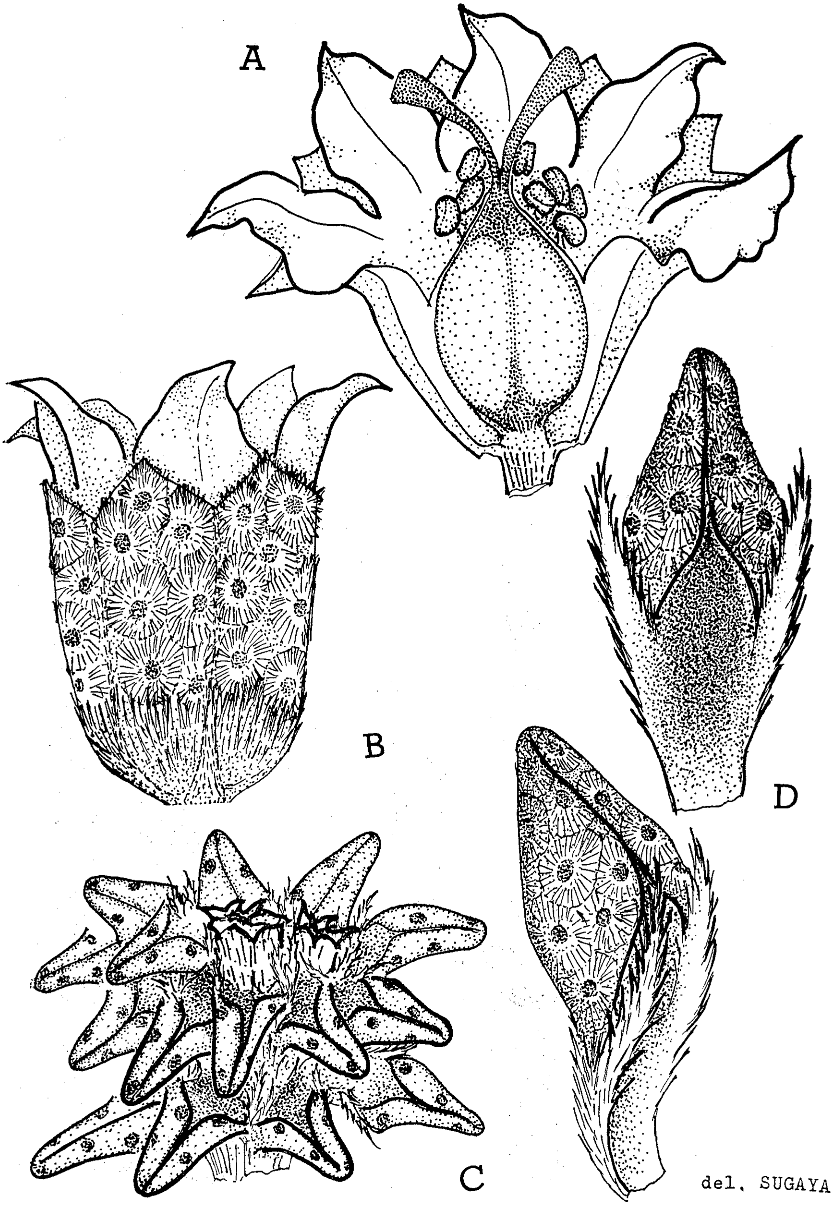

Fig. 3. *Selenothamus helmsii* Melville. A. Vertical section of the flower, partially excised. (×23). B. Lateral view. (×23). C. Flowers hidden among the scale leaves. (×10). D. Lepidote scale leaves. (×23). A. 花の縦断面. B. 花の側面. C. 葉群中に埋在する花. D. 葉及びがくの鱗毛.

幸いにも Perth でその正体が明かになり，現地の学者が *Plagianthus helmsii* F. Muell. & Tate の名で扱っていたアオイ科の濠州に2種しかない特産の植物であることが，小林氏のおかげでわかった。それにしてもこれがアオイ科など我々の貧弱な常識では考えも及ばない。もっとも，さきに花粉屋に見せたら花粉が polyforate だからアオイ科らしいという情報を得てはいたが，まさかと思う以上判断しかねていたが，やはり貧困な常識を裏がきしてアオイ科に落ちついた。なおいろいろな理由からとくに nomenclature の点で原寛氏に仲間入りをしてもらい，あれやこれやと調べた結果として濠州には従来 *Plagianthus* として扱われているものが数種あり，そのうち *P. microphyllus* (=*Lawrensia squamata* Nees) と *P. helmsii* とが R. Melville により新設された *Selenothamus* に移されて *S. squamatus* (Nees) と *S. helmsii* Melville (=*Plagianthus helmsii* F. Muell. et Tate) in Kew Bulletin 20 (1966) となったことがわかった。*Plagianthus* と *Selenothamus* の区別の要点の一つは前者が stellate scale をもっているのに後者は lepidote scale に覆われているというのである。

また，本種の図が Jour. Nat. Hist. of Sc. Soc. (1910) に出ていると Index Londinensis にのせてあるが，いまこれを見ることが容易でないので，写真をかかげることとすると同時に，東京で入手した手元の材料での観察をしてみると，軸は全面が分枝する細小な枝で覆われ，その小枝には鱗片の散在する長さ約 4.5 m で左右両側縁が表面で接近する葉が密に生じ，2個の托葉を伴う。かかる小枝の頂には，葉群中に径 2.5 mm ほどの小花が数個埋在する。蕚は管状，長さ約 2.5 mm で5片の蕚歯があり，葉で見られると同様な鱗片が散在している。総苞は無い。花弁5で無色で単体雄蘂柱に接着する。雄蘂柱は約10個の雄蘂より成り，これを貫く花柱の柱頭は2叉する。またこの珍物が草か木かという常識問題になると，これは低木の由。

尚ニュージーランドにも *Plagianthus betulinus* などあるが，こゝでは西濠州のもののひとつだけについての話題にとどめる。要するに東京で売られていたものの正体を解明しただけである。

* * * *

The present plant has been sold in Tokyo market as a dry decoration flower, but we could not recognize it taxonomically until Kobayasi found this shrub cultivated in the pot at King's Park, Perth of Australia in 1969.